2024 年小児糖尿病キャンプ 作文コンクール 原稿用紙

神奈川県 44歳 Y.M.

3行目に氏名を入力してください

5行目から本文を入力してください

日常と非日常のなかで

　キャンプに参加する次男のバスを見送り、一息ついた私は思いもかけず泣いていました。戸惑いながら考えた涙の理由は、“日常の重圧からの解放”でした。食事時間と内容、おやつのタイミング、外食時の糖質はいくつか、就寝中に低血糖にならないか、イライラけんかしているのは血糖のせいじゃないのか・・。病気を主軸に組み立てられた日常が重圧になっていたことを、はじめて自覚したのです。

　次男が小学1年生で1型糖尿病の診断をうけたのは新型コロナ禍でした。面会もままならず、十分に病気の受け入れもできないまま生活が始まりました。学校、習い事、学童、どこでも初めての例と言われ、病気自体の説明から必要でした。どの場面でも、私たち家族は、普通の子と何ら変わらず日常生活をお

20 × 20

くることができると主張してきました。この
病気を抱えながら自立するには、特別扱いを
されないことが大切なことだと思えたからで
す。それは本心です。しかしその普通には、
血糖の乱高下で体調を崩すことがないように
日常生活を整える必要があり、それに必死に
ならざるを得ませんでした。

　コロナ禍でキャンプがなかった3年間、す
っかり日常になった闘病生活を送っていまし
た。同じ病気をもつ子供たちとサポートして
くれるキャンパーに出会い、次男だけが“特
別”ではないこのキャンプは、親子とも気兼
ねなく参加できる初めての機会でした。

　次男は病気について語ることはほぼなく、
キャンプ後も特に何かを語ってはくれません。
言葉としてはきけなくても、“周りみんなで”
同じ時間に血糖をはかり、“みんなで”イン
スリン投与をする「非日常」は、次男にとっ
て重要な意味を持つと思えてならないのです。

キャンプの3日間、血糖や注射から解放されたた私たち家族の“非日常”は、キャンプできっと何かを得た次男ともに、また治療と共に暮らす日常に戻りました。キャンプの参加で、同じ病気の方が生活、成長している姿をみることで、次男を必要以上に特別視していたことにも気が付きました。この貴重な気付きと経験をくれたこのキャンプを開催、実行してくださったスタッフの皆さんには感謝と尊敬しかありません。この取り組みが、どうか続いていてくれることを願っています。

2024 年小児糖尿病キャンプ 作文コンクール 原稿用紙

20 × 20

2024 年小児糖尿病キャンプ 作文コンクール 原稿用紙

20 × 20